 「良書ご案内」

書籍名	インフレ 不可避の世界	著者名	澤上 篤人
出版社名	明日香出版社	発行年月	2022年 3月

円安が止まらない。(2022年4月) 何かがおかしい。

アメリカの消費者物価は、前年比で7%を超え、39年振りとなる物価上昇となった。インフレ懸念が台頭、FRBのパウエル議長は、22年度中に3度の利上げを表明してインフレ退治を宣言した。日米の金利差が開けば当然円安が生じ、円安が日本の物価を上昇させる結果となる。

アメリカの利上げに追随して円安を止めたいのだが、日本は利上げできない事情がある。世界一の借金国、利上げに財政は耐えられないのだ。

2020年日本の公的債務は、GDPに対して257%、アメリカは127%、ドイツは68%だ。金利が1%上がると3.7兆円の利払い、2%の上昇で7.4兆円の利払い負担が発生する。そうなれば予算が組めない、財政破綻に近い状況に追い込まれる。

原因は野放図な国債発行にある。毎年の予算編成で40%前後の歳入不足を国債発行で埋めてきた。2020年度の当初予算は102兆円、3度の補正予算で175兆円まで膨れ上がった。なんと73兆円の増額だ。

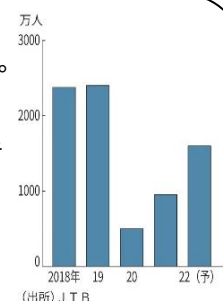
1980年代から米国を中心にマネー至上主義の経済の考え方が世界に広まった。「金融を緩和して資金を大量に供給すれば経済は成長する。」といったマネタリズムの考え方だ。その壮大な実験を日本が行った。マネー本位の経済の考え方は、実体経済から離れた虚構だったのでは。

遠からず金融バブルは崩壊する。覚えているだろうか、日本はいつか来た道を歩んでいる。1990年に入ってバブル崩壊の途についた。山一証券、三洋証券、北拓、長銀、日債信等の金融機関の破綻。それに伴う信用収縮によって連鎖倒産、多くの失業者が発生した。92年には、10兆円という対策予算が生まれ、金融緩和がスタートした。その後も2013年アベノミクス、黒田バズーカ砲という超積極的な景気浮揚策が実施され、29年間も金融緩和を続けてきた。今そのバブルが弾けようとしている。

ウクライナから始まった資源エネルギーの高騰、食料品を中心に諸物価が2桁の値上がり。世界はインフレ退治のために金利を上げて対処しようとしている。日本1国だけが金利を上げられない。国の膨大な借金が金利を縛っている。金利を上げれば財政が持たない。しかしバブル崩壊は、ほぼ時間の問題と考えられる。株式、債券は暴落の可能性がある。住宅ローンの60%は変動金利を選択している。個人も住宅ローンの利払いに苦しむことになるだろう。

本書で澤上は悲観論を展開しているが、残念ながら意義を挟む余地は少ない。 岩城

今年のGWはコロナ禍の影響が少し緩和され、2年振りに沢山の方々が移動するようだ。JTB推計によると、国内旅行者数は2021年比68%増の1600万人、2019年比で43%減の見込。海外旅行ではハワイツアーが解禁され、ウイズコロナ生活への転換が見受けられる。一方、スポーツ界ではメジャーリーグの大谷翔平選手、ロッテの2001年世代の佐々木朗希選手の活躍から目が離せず、おうち観戦も一興。文字通りのゴールデンウィークとするのはあなた次第。さて、皆様はどのように過ごされますか?!



発行所：株式会社ライフデザイン研究所

所在地：〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-4-87サビル2F

Tel 06-4708-6844 Fax 06-4708-7067

編集人 伊藤